

ンド社会における、この2つの距離感が田中の文章から浮かび上がってくる。そして、この不可触民のライフストーリーからは、インド社会の中心部から周縁部へと、一歩足を踏み入れた途端、誘惑の波が押し寄せてくる様子がうかがえる。また、日本に関しては、まず若者宿の事例が取り上げられる。この若者宿は、一部の村社会で、戦後まで存続しており、若い男女が結婚相手を見つける場として機能していた。つぎに田中は、そうした村社会のシステムの周縁に位置する男性の事例を挙げる [田中 2018: 63-64]。モロッコ社会については、周縁的存在であった男性の「女性の魔物に取り憑かれた」ライフストーリーを紹介している [田中 2018: 64-65]。

こうした田中のテキストを通して見えてきたことは、誘惑の形は、文化や時代そして社会によっても変化していくということである。また、この誘惑の形は、社会の中心部に位置するか周縁部に位置するかも変わってくる。いやむしろ、田中が指摘するように、「誘惑は、周縁的な領域で許されている行為」 [田中 2018: 65] なのであり、そのなかでこそ、誘惑本来の姿があらわれてくるといえるであろう。

誘惑は、エレガントな香りのするモードの誘惑だけではない。それは、きれいごとでは済まされない、いかがわしくも怪しい魅力たっぷりの、なまなましい人間の営みなのだ。誘惑の地平は我々が思っているよりもずっと広い。これが山田によって綴られた美しいテキストの誘惑に抗いつつ評者がたどりついた結論である。

<参考文献>

- 田中雅一 2018『誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社。
山田登世子 2000『ブランドの世紀』マガジンハウス。
山田登世子 2006『ブランドの条件』岩波書店。

坂井妙子著

『メイド服とレインコート——ブリティッシュ・ファッションの誕生』

勁草書房、2019年刊
216頁、3000円+税

国際ファッション専門職大学
小山有子

書評で紹介する『メイド服とレインコート——ブリティッシュ・ファッションの誕生』は、イギリス、ヴィクトリア朝時代の文化研究者、坂井妙子の著である。本書はタイトルにあるように「メイド服」や「レインコート」をテーマとしているが、同時に「乗馬服」、「花柄木綿のドレス」、そしてやや耳慣れない「エスティック・ドレス」をも論じている。副題は「ブリティッシュ・ファッションの誕生」で、現在の私たちが、「イギリスらしい」、もしくは“英国調”とも形容できるようなスタイルの源泉を探っている。

本書の目次は以下の通り。

- 序章 イギリス人とファッション
第一章 ミドルクラスファッション・センス
第二章 ホームズはレインコートで沼地を這い回る
第三章 乗馬服でキリッと美しく
第四章 メイドのハンナはファッション嫌い？
第五章 夏の海辺で、花柄のコットン・ドレス
第六章 イギリス人のアート感覚がファッションになる！

おわりに

目次のタイトルでもわかるが、1章に各アイテムが1つずつ論じられている。第二章では、アーサー・コナン・ドイルの「シャーロッ

ク・ホームズ」を舞台に、防水布のコートが論じられる。第三章では乗馬服がとりあげられるが、女性の、横乗りのための“乗馬用スカート”が考察される。第四章は、労働者階級の雑役婦、女性ハンナ・カルウィックの服装観を、上流階級と比較する形で論じている。ここで面白いのは、論じる軸足がハンナという女性の労働者階級、ワーキング・クラス側に立っていることだ。階級の問題は次節でもとりあげたい。続く第五章で、20世紀前半にエリザベス2世も着用したホロックス・ファッションズの花柄木綿のワンピースドレスから、19世紀半ばに大流行した、「ドリー・ヴァーデン・コスチューム」—夏の海辺用で、花柄の木綿製ドレス—を引き、そのデザインに連続性を見ている。最後に第六章では、「エスティック・ドレス」という、あまりなじみのないアイテムが登場するが、このドレスの有名メーカーは誰だろう、リバティ商会であった。

本書はこうして、女性用男性用の衣服アイテムを通じて「ブリティッシュ・ファッション」、「英国調なるもの」を論じているのだが、本書を通底する“主人公”は、それらの衣服アイテムではないと感じられる。“主人公”は章のタイトルにも入り込んでいる、着用者である「イギリス人」や「ミドルクラス」という階層だ。そのため、本書評では、各章で豊富な資料とともに論じられている個別のアイテムではなく、全体をまとめる「イギリス」らしさ、「イギリス」らしさの探求、イギリス人によって作り上げられた「ブリティッシュ・ファッション」について注目したい。

1 時代と都市

本書で論述の対象となる時期は、ヴィクトリア朝時代と呼ばれる19世紀後半だ。1870年から「ヴィクトリア女王が亡くなる1901年」ほどの時代である。日本では江戸から明治へと変動するその同じ時期に、著者

は「ロンドンがファッションを発信する都市になった」（本書、4ページ）と指摘する。その理由としては、それまで世界のファッションの中心地であったパリの影響力が低下したことがあげられる。しかし、「ファッションの都」パリの“地盤沈下”だけで、ロンドンがファッション都市として浮上したわけではない。ロンドンという都市が、当該期に「コスモポリタン都市」として発展したことを坂井は指摘している。「コスモポリタン都市」とはどのようなものであろうか。著者が論じるに、当時のロンドンには、さまざまな地域や民族の、世界中からの人びとの来訪があり、そうした人びととともに美しいものや珍しいもの、「最新流行や最高級品」がもたらされたという。そしてロndonは、それらを「購入する場」として機能していたばかりでなく、「それらを見せる舞台」（6ページ）としても大きな力を発揮していた。これは重要なことだ。どんなに珍しい、どんなに素晴らしく美しいものを身につけたとしても、それをそのようなものとして正当に評価される場がいなければ、せつかくの身なりもその魅力は半減する。ヴィクトリア朝も現在も同じことだ（現在ではその舞台がSNSであり、写真や動画としてだけ存在するとしても）。

ロンドンがコスモポリタン都市として、人やモノを引き寄せる“空間”として発展したとき、それを享受したのが、「ミドルクラスと呼ばれた中間層」（7ページ）の人びとであったという指摘も重要だ。しかも、力強く牽引したのが女性たちだというなら、なおさらである。かつての貴族階級（上流階級）とは異なり、「労働によって糧を得ているミドルクラスの人々は、アッパークラスの経済力（略）には遠く及ばない」（7ページ）。しかしそのことがかえって、本書の全般にわたって論じられる「ブリティッシュ・ファッション」を確立させた原動力となったことは非常に興味深い。「ミドルクラスの女性たちの商品に対する関心と評価、選択も、ブリティッ

シュ・ファッションの形成と発展に大きく影響を与えた」(7ページ)のだ、と著者は述べる。「ブリティッシュ・ファッション」が他者から与えられたもの、押し付けられたものではなく、そこに彼らの能動的な「選択」が入っていたことは、注目の上にも注目したい点である。

ファッションの歴史で振り返れば、当該期は、ヨーロッパでの最後のドレス時代を(文字通り)飾り、来るべき次の時代(現代のわれわれはその末端にいると言えるかもしれないが)、“モダン”の揺籃期だ。最後のドレス時代に、すでにイギリス、ロンドンでは、次世代のマインド(精神)が育ちつつあった。

2 劣等感とその克服

さて、こうした次世代マインドとしてのミドルクラスの感覚とは、どのように描かれるのだろうか。ここではとくに、ヴィクトリア朝時代のイギリス人の前に立ちふさがる、大きな2つの“壁”について考えたい。「ブリティッシュ・ファッション」の根幹は、この巨大な“壁”に対する劣等感と、その克服にあると言える。

1つめの“壁”は階級である。言うまでもないが、かつて、ファッションとはつねに「持つ者」だけの、ものであった。当たり前である。「持たざる者」は、持たない、持っていないからだ。「持つ者」だけが、単なる衣服にさまざまな意味を与え、それらの衣服があらゆる意味を“正しく”表現する服装にして、身なりを整え、かつ、美しいという評価を引き出すためにさまざまな努力をした。「持てる」だけのアイテムとそれらの知識を駆使して。

しかし、著者は「それほど持たない」階層に注目している。ヴィクトリア朝時代後半に刊行された雑誌『イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』は、ミドルクラスの中層・下層をも読者対象とした雑誌であったというが、そこでの価値観が、次世

代マインドに影響を及ぼしていることを坂井は指摘する。当時としても古臭く感じられる道徳観であるにもかかわらず、だ。それらとは「清潔な衣服」で、「控えめな態度」をとるべきこと、「華美を避けること」、「身分相応」を心得ること、などなど。こうして羅列すると、「持たざる者」への抑圧や戒めでしかないように思われるのだが、著者の論述はそれを覆す。詳細は本書をお読みいただくとして、これをたとえて言うなら、少し後の時代にあられる、貧しい生まれのデザイナー、ガブリエル・シャネルの“戦略的”地味さに通じる。日本語での地味という語は否定的な意味合いを多分に含むが、これが「簡素」、もしくは「シンプル」であればどうだろう。シンプルとは、無駄なものをそぎ落としたさまとして、「持てる者」の華やかさを“あえて”、“戦略的”に否定しうる。そうした「控えめ」、地味さは、まさにモダンマインドの核だ。モダン精神の先取りであると言える。

もう1つの巨大な“壁”は、「フランス」・「パリ」や「フランス人」だ。かの地、彼らに対する大きな劣等感があってこそその「イギリス」、「ブリティッシュ・ファッション」なのだ。コスモポリタン都市として、活気あふれるロンドンにあってなお、やや陰りを見せているファッションの都、パリが立ちはだかる。なんと刺激的な構図だろう。著者が引用する1876年刊行の書籍では、そんな「パリ」および「フランス」に、はっきりと敗北を認めてもいる。

フランスの女性はこれらのこと〔ファッションにおける色彩感覚：筆者注〕にある種の直感を持っていますが、我々イギリス人はしばしばとても劣っています(後略)。(33ページ)

とはいえ、この敗北宣言とて、ある種の“戦略”のようにも感じられる。まるで、ロンドンが発展を続ける都市であったことを背景に

した“戦略的敗北”のように。花の色があせつつあるパリへの、敗北さえ認められるほどの余裕を行間に読み込んでしまうのは、読み込みすぎだろうか。しかしながら、自分たちが持たない洗練された色彩感覚は「観察と訓練」で埋め合わせられる（33ページ）という同書の信念は、すでに対戦相手の実力に陰りが見えているからこそその発言ではなかっただろうか。

これらの巨大な2つの“壁”のあることで、「イギリス」の「ミドルクラス」の人びとは、新たな自分たちのための価値観をどのように構築するべきかが、いっそう明確になったことだろう。著者の坂井は「おわりに」で、こう述べている。「ミドルクラスの人々の価値観と産業の発展に裏付けられた実践力が、アッパークラス主導のハイファッションを消化・吸収し、時に反発、問題を提議することで、モダンなブリティッシュ・ファッションを成長させた」（175ページ）のだと。自らを見つめ、自らを描いているはずの「ブリティッシュ・ファッション」という“自画像”。しかし実際は、他者という“壁”によって—その“壁”はおそらく鏡としての役割をも担ったに違いない—、イギリスの近現代的自画像を描き得たと言えるのではないだろうか。

3 他者という鏡と自画像

この『メイド服とレインコート』を読みながら、ずっと日本のことを考えていた。日本はどのようなものを“自画像”として提示できるだろうか。日本では当該期（ヴィクトリア朝後期）は、江戸から明治へ、西洋化・近代化を推し進めた時代だ。そして、面白いことに、イギリスと同じように、「劣っているわれわれと、西洋人の彼ら」、という“壁”

を前に、自分自身をどのように描くか迷っていた時代でもあった。明治後期の婦人雑誌にも似たような記事があったことを思い出す。自分たちの着ているものについて考えること、身なりについて考えるくぐり、本書でのイギリス人の思考とまったく同じことだ。着物と洋服との差異を目の当たりにして、着物を近代化しようと試みてもいる。日本人がどのように自分自身を描いていたのか。西洋人の彼らは背が高く、堂々としているが、日本人のわれわれは体も小さく貧弱だ。彼らの洋服を美しく着こなすことはできない。人種も違えば体格も違うはずだ。われわれは何を着るべきなのか…。

もちろん日本には「着物」という伝統的な衣服がある。しかしながらそれはほかの地域にも同じように存在する「民族衣装」の1つだ。そして現代の日本では、私たち自身の「着物」は、すでに非日常の領域にしか存在していない。たとえば夏の浴衣や、成人式や卒業式などの特別なセレモニーのための、いわば「コスプレ」だ。そう考えると、イギリスがうらやましくさえる。イギリスという国は、いや、日本にとって“英国”は独特なのだ。日常においてなお、“英国調なるもの”、「ブリティッシュ・ファッション」は確立されているのだから。

坂井のまよめの言葉をそのまま日本に置き換えさせてもらおう。日本には、「西洋人主導のハイファッションを消化・吸収し、時に反発、問題を提議することで、モダンな日本的ファッションを成長させた」ことがあったろうか。この問いに答えること、また、答えるための振り返りの作業もまた、現代の日本にとって重要なことになるのではないだろうか。